日本色彩学会関東支部 2020 年度講演会第 2 回開催報告

Report of the Kanto Branch Symposium

「ダ・ヴィンチ没後 500 年「夢の実現」展 講演会：レオナルド作品の帰属判定とヴァーチャル復元」

東　吉彦（関東支部支部長/東京工芸大学）

2020 年 10 月 18 日（日），八王子学園都市センター（12Ｆ イベントホール）にて関東支部と画像色彩研究会の共催で「ダ・ヴィンチ没後 500 年「夢の実現」展 講演会：レオナルド作品の帰属判定とヴァーチャル復元」が開催されました．

本講演会は，東京造形大学レオナルド・ダ・ヴィンチ再現プロジェクト ダ・ヴィンチ没後 500 年「夢の実現」展（9 月 1 日より 11 月 29 日まで八王子の東京富士美術館にて開催）に合わせて開催されたもので，プロジェクトのリーダーを務められた東京造形大学の池上英洋教授をお招きして，レオナルドの未完作品の再現に関する研究成果についてご講演頂きました．

当日は好天に恵まれ，講師・スタッフを含め 67 名が参加，色彩学会からは 15 名の参加がありました．その他 41 名が一般参加者という一般の方にも関心の高いテーマであったと思われます．新型コロナウイルス感染予防のため参加は予約制とし，入場時には一人一人検温が行われ，マスク着用にて一席間隔で指定された座席への着席をお願いしました．当日は，東京造形大学の粟野教授をはじめ研究室の学生さん 7 名にもスタッフとして運営を手伝って頂きました．この場を借りてあらためて感謝申し上げます．

講演では，レオナルド・ダ・ヴィンチの作と言われる多くの作品から，いかにして本当のダ・ヴィンチ作品を見つけ出すかについて解説がありました．また，ダ・ヴィンチ作品と判定されたものについて，未完成の部分をデジタル的に復元した内容が紹介されました．以下に要点をまとめて記載します．

ダ・ヴィンチによる絵画作品には、彼の特徴である四つの要素（スポルヴェロ転写法，ペンティメントの痕跡，スフマート技法，左利きハッチングライン）の有無を丹念に調べることでダ・ヴィンチの手によるものかどうかがわかるそうです．これには，高解像度の赤外線反射撮影カメラが使用され，絵の具層の下に描かれた下絵や塗り重ねの筆跡などが分析されました．

スポルヴェロ転写法は，本来壁画や大画面に使用されますが，モデルを短時間しか拘束できない場合にも使用され，使用された場合に見られる小さな孔の痕跡が判断材料となります．ペンティメント（描き直し）は，単純模写では起きないので，オリジナルと判定する根拠となります．スフマート（ぼかし）技法では，指紋や掌紋が見つかることがあり，ダ・ヴィンチのものであればその作品が彼の手によるものと判定できます．最後に，作品中にハッチング（線影）が描かれている場合，そのラインの方向で右利きか左利きかがわかるので，ダ・ヴィンチの利き手（左）と合っているかどうかで判断できます．

また，ダ・ヴィンチは，見えていないものは描かない主義だったので，輪郭線が絵に描かれない点も本人の作品であることを支持する根拠になります．その他，作品の注文依頼や制作状況に関して書かれた幾つかの報告書の内容からダ・ヴィンチの作であると判定する場合もあるとのことです．

図１　ヴァーチャル復元について説明する池上先生

以上の分析を基にダ・ヴィンチ作と判定された作品について，ヴァーチャル復元を施した結果が紹介され，参加者は感嘆の眼差しでスクリーンに眺め入ってい

ました．最後に，モナリザの微笑みがスクリーンに表示され，盛大な拍手とともに講演は終了となりました．

図 2　講演会場の様子

今回，講演を聴いた後，東京富士美術館を訪問して実際の復元作品を鑑賞できるよう講演時間を 1 時間としましたが，とても興味深く分かり易い内容であったため名残惜しく，もっと話を聴いていたいと感じられました．講演終了後も 10 人ほど参加者が舞台そばに集まり，講師の池上先生との質疑応答で賑わっていました．参加した色彩学会員の多くは東京富士美術館へ移動し，実際の復元作品を鑑賞することで，講演の内容を自身の目で確かめ，納得できたのではないでしょうか．

なお，東京富士美術館様からは会員用に無料招待券をご提供頂きました．ご厚意に深く感謝申し上げます．